

# 日本ラグビーの今後 2019年に日本開催されるラグビーワールドカップに向けて

## The future of Japan's rugby Heading to the success of rugby world cup 2019 hosted by Japan

1K10C232-1 須藤拓輝

主査 寒川恒夫 先生

副査 島田陽一 先生

### 【目的】

本研究では日本代表がW杯で勝利を獲得し上位に食い込み、開催国としての責任を果たしていくため、今後どのように成長していくべきかを検討することを目的とする。

### 【方法】

本研究では、ラグビーの歴史や具体的な戦術、その他様々な角度から分析し研究を進めていく。

### 【動機】

2013年9月8日のアルゼンチンで行われたIOC総会で、2020年に日本で五輪が行われることが決定した。この決定に日本中の人たちは大いに喜び、感動し、未来への希望が大きくなったことと思う。日本開催が決定される少し前の2009年にラグビーW杯が2019年に日本で行われるということが決まった。日本人にとってあまり関心がなく、それほど大きなニュースにもなっていないが、ラグビーW杯は、夏季五輪、サッカーW杯に並ぶ世界三大スポーツイベントの一つで、冬季五輪や世界陸上など日本で人気のあるスポーツイベントより、世界的に認知されており人気のあるスポーツイベントなのである。世界的にも注目度の高いビックイベントが二年連続日本で開催されるというのは大変光栄なことであるとともに、日本にとって、そして日本ラグビーにとって大きなチャンスである。

本研究では、その中でも、ラグビーW杯に焦点をあてていきたい。

2019年、そして2020年と、ビックイベントが日本で行われると決まっている中で、日本の国民の目は確実に2020年の東京五輪に向いており、当然注目度も大きいだろう。

日本は、1980年代のラグビーブームが過ぎ去ってから、ラグビー人気が少しずつ下降している状態である。そんな中で、2019年に予定されているW杯は、ラグビーをより多くの人たちが観てもらい最高の機会になる。このチャンスをなんとかいかかして、もう一度ラグビー人気を再燃させたい。し

かし、それには日本代表が強くないことには、難しい。日本代表がどのようにして、強くなっていくべきか。体格では不利があり、コンタクトスポーツにおいて日本人の勝利は厳しいと言われていたが、逆に体が小さいというところを生かした戦略や、戦術で世界と戦っていくそういった道を、本研究を通して模索していきたい。

### 【歴史】

ラグビーという競技の始まりは、エリス少年がフットボールの試合中、ボールを持って走り出したというルール無視のハプニングが起源とされている。それから始まったと言われるラグビーが、慶應義塾大学の英語の教師として来日していたE.Bクラーク氏が生徒にラグビーを教えたことで、日本ではじめてラグビーが誕生した。その中で、当時友人であった後に、日本ラグビー協会の名譽会長となる田中銀之助に協力してもらい、慶応大学学生に細かい指導や説明を頼んでいた。

そして、1899年に日本初のラグビーチームが誕生したのである。

それから、慶応大学、早稲田大学、明治大学を中心に日本で少しずつラグビーが発展していき今に至っている。

### 【結果】

実際のラグビー強豪国と日本代表との身長体重のデータや環境整備の重要性など、ラグビーとは間接的なところで考察してきたものと、具体的な勝つための理想のプレーヤー像、4Hを中心とした日本人ならではのラグビースタイルによって具体的な日本代表が目指すべきモノが本研究の中で定まった。日本代表は強く強靱なフィジカルフィットネスと多様なスキルをベースとした知的なラグビーをしていかなければならない。

理想のプレーヤーに少しずつ近づいていくことで、世界で勝っていけるチームを作る。それが、2019年の日本開催のワールドカップで日本代表が上位に少しでも近づき、ホスト国としての責任を果たし、もう一度ラグビー人気を再燃させる着火剤としての成功を収めるための道であるという結論に至った。